

## 読書の楽 : 雑録

著者	雲溪, 漁史
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 4
ページ	4 1 - 4 5
発行年	1894-03-05
その他の言語のタイトル	読書の楽 : 雑録
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4360">http://hdl.handle.net/2298/4360</a>

十九頁七行「咽ばえむる」の間「思想を與ふる」の六字を脱す。

## 讀書の樂

雲溪漁史

深山幽谷の邊より遷り來りて、梅が香に啼く鶯も、觀じ來れば樂めるが如き。芳草原頭東風に嘶ゆる牧馬も、觀じ來れば樂あるが如し。水に鳴く夏の蛙も、露にすたく秋の蟲も、觀じ來れば樂あるが如き。賤が伏屋の額れ籬に笑を含む菊の花も、觀し來れば樂あるが如し。げに樂は何物にも缺くべからざるものにあらざるも、或やこればかりせば、如何に社會はありつらむ。色もあく、香もあく、味もあく、一日も以て生活するに堪へざるべし。思ひ見よ、深山遠く薪を拾ふ樵夫には『山行歌』あり。波路遙かに楫を操つる舟子には『舟子歌』あるにあらざるや。霖雨濛々として晝尙は暗き時、水田に脛を没して、早秧を挿むものは、『田植歌』を歌ふて樂み、花落ちて鶯聲老へ、新緑陰をまして、前林靜なる頃しも、獨り營々として茶を摘むものは、『茶摘歌』を歌ふて樂むにあらざるや。

彼の富貴に傲るもの、富貴を求むるもの、名利を得たりとて驕るもの、名利を得んとて走るもの、彼等果して如何なる樂を有し、或は有せんと欲する乎。彼の大厦高樓に坐し、酒池肉林に遊び、紅裙紫袖を侍べらせ、絲竹管絃の音に浮るゝを以て樂とあす乎。げにや、富貴ある間は、或は樂きまともあらん。名利を持する間は、或は樂しきまともあらん。されど汝等知らざる乎。富貴は水の泡の如く直に消ゆるものあるを、名利は風の前の燈よりも尙は危きものあるを。實に是等は以て永久の樂となすと能はざるなり。否な是等は眞個俗界の樂にして、其醜、其俗、其穢、其陋、厭ふべく、賤しむべく、恥づべく、笑ふべきの甚だしきものにあらざして何ぞ。果して然らば、貴きも、賤きも、貧きも、富めるも、

同じく、享受し得て、盡くるなく、窮りなきの樂は、那邊に存する乎。嗟、この疑問ころ、千古より人の答へんと欲して尙ほ踟躕する所なき。吾人をして、思ふところを述べしめば、春は花に歌ひ、秋は月に吟じ、夏は縁樹に憩ひ、冬は雪を愛で、自然の靈光に浴し、自然の靈光を樂む如きは、我れ人皆享け得る樂たらずんばあらず。然れども、更に高尚幽妙にして、其味清く、其神遠く、人をして陶然我を忘れしむるものあり。是れ何の樂なる乎、曰く他なし讀書の樂是れなり。

思ふに、人間は他の感化を受けるものはあらじ。朝に夕に聖賢君子に接すれば、知らず識らずの感化に浴し。俊雄傑士に接すれば、その志氣何時ぞか薰染し。無罪無邪氣なる兒子に向つては、我もまた宛然小兒となる。然れども、この世は假面の怪物多し。果して然らば、何處に向つて哲人君子を求めん乎。何處に向つて俊雄傑士を求めん乎。乞ふ机上の書冊を繙けよ。

道義の光こゝに滅し、天地慘憺として腥風時に起る。是の時に當り、已れ獨り正義を採り、立て隣人よ問へば隣人答へず。呼んで路人に問へば路人答へず。叫んで天下に問へば天下答へず。答へざるにあらず。愚人と答へ、痴人と答へ、狂夫と答ふるなり。誹謗霧の如く起り、罵詈雑言の如く降り、天地廣しと雖、身を容るゝの地なく、左右前後咫尺辨すべからず。是に於て、何れの處に友を求め、慰撫者を求め、同感者を求めて以て志を訴へ、心を慰め、氣を養ひ得る乎。乞ふ來つて書冊に對し、達人君子、俊雄傑士の傳を讀み、言行錄を讀め。書中れ偉人は如何なることをか語る。或は教へ、或は慰め、或は同情同感を表す。是に於て、忽ち已れの位置を忘れ、書籍に同化し、古今の覇を一蹴して、古人と膝を交へて、艱難を談り、快樂を談り、戰闘を談り、平和を談り、古へを談じ、將來を談じ、人生を論じ、宇宙を論じ、彼笑へば我笑ひ、我怒れば彼怒り、彼泣けば我も亦泣く、嗚呼這般の樂それ如何。

人の最も悲哀を感ずるは、老ゆるより甚しきはなし。されど、咲く花は必ず凋み、積もる雪は必ず溶く、若うりしものは、必ず老いざるべからず。人生原頭に馬を立て、生氣潑々、滿腔の希望を抱き、遠大の計略を胸に湛へて、未來を夢見る盛春の時は何時しか過ぎ、悲慘の秋風吹き來りて、白雪頭をうづめ、腰に梓の弓を張り、日一日、冷たき墓場に近く時には、嗟、何處に向ひて樂を求むべきか。益軒翁の樂訓は説きし如く、四季をりく、自然に向ひて樂を求むべき。されど、老の身の自由あらざるを如何にせん。實にこゝに至りては、自然の靈光に浴することも亦能はざるあり。然れども、一たび書冊に對し見よ。秋深ふして、椰樹花雪の如き所に至り、白鷗鳴く珊瑚礁上に、鼈と遊び、或は水の國に至りて、馴鹿を驅つて橈を走らし、或は金をも熔す熱地に至り、恐ろしき獸類を狩り、喜ばしき樹木の下に憩ひ、或は白人と談り、黒人と話し、或は蜀の山川を跋涉し、或は白雪皚々たるアルプス山にエキセルシオーを歌ひ、ラインの流に楫して、碧綠の中にミューズと戯れ、須磨、明石、高砂、尾上の朝暮に幽を探り清を觀し、吉野の花にあかれ、琵琶の水に浮び、蒲團着て寐た姿ある東山に逍遙し、立田の河畔にイミて、渡らば錦な、かやたへんとためらい、逢坂山の麓に琵琶の音をすまし、さては不二の高峰に日本の詩神を伏し拜み、或は梅花の中に鶯聲を聞き、梨花乃清白に美を思ひ、稷々たる松聲に耳を洗ひ、老を忘れ、過去を忘れ、現在を忘れ、未來を忘れ、塵緣脱し去りて、眞如の月圓かに中天にかゝり、書齋の天地廣く、高く、且つ清ふして、鶴蒼穹を渡つて、天樂幽かに耳に落つるの心地やせむ。

我說當世に用いられ、我言社會に信せられて、一たび好運に乗するや、親戚隣人は、諂諛の笑を漏らし、我が前に舞ひ、我が前に鼓つ。されど一旦、足を幸の山に失して、不幸の谷に墜つるに及んでは、

親戚は招きても來らず。隣人は呼べども應へず。隣人親戚尙は然り、況んや其他の人をや。只だ時に我が苦を慰め、我が情を暖むるものは、兩三輩の親友あるのみ。然れども、我が旨義益す世と相背戻し、且つ貧愈甚だしく、不幸愈重なる後に至りては、兩三輩の親友も多くは他人となりて、石地像に化身し終るあり。此時に於て、誰に向つて我思を陳べ、我心を訴へ、我悲を告げ、我憂を漏すことを得べきぞ。此時に當りては即ち我は孤獨あり、茫々として万里涯を見ざる沙漠の中央は只一人捨られたるなり。されど敝屋破窓の下、氣を平かにし心を虚にして、史冊を繙かしめよ。愁眉忽ち開けて、思想の潮勢、一波は一波より高くなり、千波万波洶し來り洶し去りて、屹然として人間以上のものとなりたるが如き感念なくんばあらずるべし。

年少氣銳、滿腔の希望を抱きて、人生の大海に舟を進むる數多の青年、果して幾人か其の希望を遂げ得るものぞ。否、希望の幾分だに遂けたる幾人かある。海上波高ふして、吞天の希望、空しく画餅に属するもの滔々皆しかるにほらずや。希望空しく画餅に属す、其の心情果して如何。乞ふ此等のものを煮て、讀書の樂を知らしめよ。悲を慰め、憂を去り、鬱を開き、愁を散する易々たらん。革命の健兒、吉田松陰曰く、『讀書尙友、君子之事也』と、『君子之事也』の五字、實に千萬無量の意味ありと云ふべし。而して『尙友』の事亦讀書に於てあるにほらずや。

述べ來り述べ去り、吾人は逆境に沉淪したるものゝ爲め、讀書の樂を論じたり。吾人が殊更愛に彼等が爲に論じたるは、順境に在るものよりも、更に彼等が樂を享受せざるべからざる必要あればあり。富貴の人、高位の人に於て、讀書の樂を有せば、其樂は洋々乎として、云ふべからざるものあらむ。

佛國有名の大學者フエチロン曰く、若し王冠を持ち來りて余の足下に置き、以て余の讀書癖と交換せんと要求するものあらば、余は直に其王冠を蹴却することに踴躍せざるべしと。歴史家ギボン亦曰く、讀書の嗜みは余の生涯の愉快なり、又榮譽あり。若し全印度の富を以て、之に易へんことを求むるものあるも、余は決して肯せざるべしと。實に然り、誰か然らざると云ふ。

誰か『書中自有三千鐘粟』を以て書を讀めと云ふ。誰か『書中自有黃金屋』を以て書を讀めと云ふ。誰か『書中車馬多如簇』を以て書を讀めと云ふ。誰か『書中有女顏如玉』を以て書を讀めと云ふ。良田、華屋、僕從、美女の樂、俗中の俗あることを知らざる乎。書中更に崇高あるものあり。更に奧妙あるものあり。更に純傑神聖あるものある也。嗚呼讀書なる哉、讀書ある哉。

## 文苑

### 聖主立憲頌

明治二十三年  
紀元節所草

教授 内田周平

皇德日新。敢發振古之隆典。民志忽奮。爭獻全國之昌言。聲響相隨。上下同慮。恭惟。堯瑞穗邦。二儀凝精特秀。赫天日嗣。萬國合仁莫京。瓊矛一下。三器之尊永傳。玄德代敷。兆民之慶不測。高臺望烟。寶訓垂乎萬古。寒宵脫袞。龜鑑傳于千秋。開物成務。上聖每應其時。利用